



学校だより

明けましておめでとうございます

校長 西沢 盛和

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、清々しい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年も皆様にとりまして、素晴らしい一年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

さて、昨年は、中央教育審議会が平成32年度(2020年度)から始まる次期学習指導要領についての答申を出しました。この学習指導要領がカバーする2030年ごろの社会の姿を考えてまとめたものとされています。

2030年ごろの社会は、情報化やグローバル化が人間の予測を超えて加速度的に進展し、とりわけ第4次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が社会や生活を大きく変えていくと予測されています。「いかに進化した人工知能でも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理であるが、人間は、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことができる。このために必要な力を成長の中で育てているのが、人間の学習である」と、この答申では学習を定義しています。

そして、子供たちの学びを「主体的・対話的で深い学び」にしていかなければならないと強調しています。「主体的な学習」については、私が教職に就いた当時から変わらぬ課題としてあげられていますが、注目すべきは「対話的な学び」です。「子供同士の協働、子供と教職員との対話、子供と地域の人の対話、先哲の考え方を手掛かりに考えることなどを通じ、自己の考えを広げ深める」という例示があるように、これからの学習は一人でやる学習だけでなく、友達との協働を始め、自分と関わるすべての人と「対話」しながら、自己の考えを広げ深めることが求められています。

新年の抱負として、私はこの「主体的・対話的で深い学び」を実現することのできる学校づくりに邁進することを掲げます。校歌にもあるように、学校は「われら今友とつどいて、体を鍛え、知識を学び、未来を語る」場所です。自分一人ではなく、友達と仲良く、学び合い、高め合うことのできる姿勢や態度こそが、今後さらに求められる能力だと私は実感します。そして、小学校の学習集団としての学級はそのまま、中・高へと引き継がれていきます。どの学年、どの児童も「主体的・対話的で深い学び」ができる、そういう学校にするために、今年も全力を尽くします。どうか今年も変わらぬお力添えをいただきますようお願いいたします。

1月の行事予定			16	月	全校朝会 発育測定
1	日	元日 海開き 成人式	17	火	発育測定
2	月		18	水	運動集会 SC
3	火		19	木	
4	水		20	金	クラブ活動(3年生見学) ロードレース前検診 SC
5	木		21	土	
6	金	冬期休業日終	22	日	ロードレース大会
7	土	武道始め	23	月	全校朝会
8	日		24	火	
9	月	成人の日	25	水	ゲーム集会 芝スポの日
10	火	始業式	26	木	
11	水	誕生日・音楽集会 安全指導 芝スポの日	27	金	クラブ活動 SC
12	木	弁当始 書初め大会	28	土	学校公開 道徳授業地区公開講座
13	金	委員会活動 避難訓練	29	日	ロードレース大会予備日
14	土		30	月	振替休業日
15	日	新年こども餅つき大会	31	火	全校朝会

<生活目標>

担当 木村 隆志

○自分の目標に向かってがんばろう。

新年が明けました。2017年への展望、抱負をもって正月を迎えることができましたでしょうか。1月は、1年間の学校生活の最後の学期を迎えます。3学期は、その学年のまとめ・締めくくりを行う学期であり、次の学年への準備の学期でもあります。

まずは、自分の目標を掲げること、そして計画的に進んでいくことが大切です。子供たちの“道標”となるような指導・支援を学校・保護者・地域が一体となって行っていけるようご協力よろしくお願ひいたします。

<安全指導>

担当 武村 健司

○けがや事故に気をつけて運動しよう。

ロードレース大会が近づいてきました。学校の外でも子供たちが練習する姿がたくさん見られるようになりました。

走る際は、車や自動車との接触に十分気をつけてください。また、夜はとても暗いです。先月、警察の方から反射板を頂き、配布しましたのでご活用ください。けがなく本番を迎えて、力を発揮してほしいと思います。

教育相談活動

特別支援担当 清水 智

「人が環境をつくり、環境が人をつくる」

と言われます。

本校では、ハード面での環境整備に重点を置く一方で、ソフト面に当たる「心」の環境整備にも重点を置いています。

ソフト面における環境整備の一つに“教育相談”が挙げられます。大人も子供も、一人で悩まずに誰かに気持ちを打ち明ける場として、スクールカウンセラーによる教育相談をお役立て下さい。



スクールカウンセラー

池田 恒平

<経歴>

文教大学院修了

埼玉県内精神科クリニック勤務

埼玉県内教育センター勤務

スクールカウンセラーに相談するときは

- ①担任や副校長を通して事前に予約
- ②面談日時決定
- ③面談の実施

本校では、週ごとの子供たちの様子について、全教職員で共通理解する場を設けています。その他にも、生活指導朝会や職員会議、教育相談会議等を通して、全職員で支援できる体制を整えています。

担任はもちろんのこと、いつでもどの職員にでも気軽に相談ください。

ロードレース大会

ロードレース実行委員 清水 智

第44回小笠原ロードレース大会が今年も、1月22日(日)開催されます。風邪等が流行する季節ですが、全児童が元気に参加できることを願います。

学校では、12月上旬からランニングカードを配布し、朝の時間や20分休み、体育の時間などでランニングを行っています。どの子も徐々に自分のペースを考えながら走り切れるようになってきました。

本番まで残りわずかとなりましたが、ランニングカードをぜひご家庭でもご覧になってください。1枚で約20km走ったことになるように作ってあります。放課後や自宅周辺で走っても記入することもできますので、ご家族や友達と誘い合って走ってみてください。

また、本番で気持ち良く走れるように、①体調②服装③持ち物などの準備もよろしくお願ひします。準備をしっかりとすることで、本番への自信にしてください。

ご理解ご協力宜しくお願ひします。※予備日は1月29日(日)となります。



写真：昨年度の4kmの部スタートの様子

学校で飼育していたチャボの“オッチャン”が1月3日に亡くなりました。3羽の中で一番年長鳥で、学校に10年以上いたのではないかとのことです。4日、I BO・支庁土木課の指導のもと、飼育委員会の担当木村教諭と飼育委員会の子供たちでお墓を作り、埋葬しました。お知らせさせていただきます。

今年も次期学習指導要領実施準備の年

— 「学習指導要領改訂についての答申」（平成28年12月21日：中央教育審議会）より—

「朝日新聞」（平成28年12月22日）では、答申の内容が次のように伝えられました。（なお、記事は全文でなく、小学校にかかわる部分を抜粋しています。）

中央教育審議会は21日、学習指導要領の改訂について審議結果をまとめた答申を松野文科相に出した。松野文科相は答申を受け、小中学校については今年度中に新学習指導要領を示す。新学習指導要領は小学校は2020年度、中学は2021年度から全面的に実施する。

今回の改訂では「何を覚えるか」が中心だったこれまでの指導要領を転換し、それぞれの教科を学ぶことで「どんな資質・能力がつくか」も明記する。

グローバル化や情報技術への対応も充実させる。小学5、6年では英語教育を教科に格上げ。「話す・聞く」に「読む・書く」も加え、授業時間を週2コマ分（年間70コマ）に倍増する。3、4年も週1コマ分の「外国語活動」を始める。「プログラミング教育」も加わり、コンピューターに指示を出す作業を体験して基礎的な考え方を身につける。

小学校の授業時間は、これまでの限界とされてきた週28コマ（年間980コマ）を超える。

小中高を通じてアクティブラーニングの視点も強く打ち出した。先生が一方向的に教える形ではなく、能動的に参加できるようにした指導・学習方法を全教科で求める。

1998年の指導要領改訂では「ゆとり教育」で内容を3割減らしたが、学力低下批判もあり、08年の改訂では「脱ゆとり」を掲げ、逆に増やした。今回も内容は減らさない方針だ。

この答申では、子供たちの現状と課題について、次のようにまとめている。

・子供たちの学力については、国内外の学力調査の結果によれば近年改善傾向にある。子供たちの9割以上が学校生活を楽しいと感じ、保護者の8割は総合的に見て学校に満足している。

・判断の根拠や理由を明確にしながら自分の考えを述べることなどについては課題が指摘されている。

・視覚的な情報と言葉との結びつきが希薄になり、教科書の文章を読み解けていないとの調査結果があることなど、読解力に関する課題も指摘されている。

・豊かな心や人間性を育てていく観点からは、生命の有限性や自然の大切さ、自分の価値を認識しつつ他者と協働することの重要性が指摘されている。

道徳の教科化に当たっては、多様な人々と互いを尊重し合いながら協働し、社会を形作っていく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどのように生きるべきかなどについて考えを深め、自らの生き方を育てていくことなどの重要性が指摘されている。

・体力については、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向や、スポーツを「する」のみならず「みる、支える、知る」といった多様な視点から関わりを考えることが課題となっている。

・障害の状況や発達の段階、学習や生活の基盤となる日本語の能力、家庭の経済的な背景など、子供の発達や学習を取り巻く個別の教育的ニーズを把握し、そうした課題を乗り越え、一人一人の可能性を伸ばしていくことも課題となっている。

本校においても、子供たちの現状と課題は、寸分の違い

もなく当てはまるものだといえます。これらの課題を乗り越え、予測困難な、変化の激しい社会の中にあっても、一人一人の子供たちが自らの可能性を発揮し、豊かな人生を実現することができるようにすることが、学校の責務です。

そのためにも、今回の学習指導要領の改訂を踏まえ、これまでの指導を振り返り、すべての教科で授業改善に取り組んでいきます。それが小笠原小学校、平成29年、新年の抱負です。

では、具体的にはどのように授業改善をしていくのかということですが、巻頭に上げた「主体的・対話的で深い学び」ができるようにすることです。

外国語教育を例にして考えると次ようになります。

現状の英語教育では、高校卒業レベルで英単語3000語、「読むこと」「聞くこと」に比重が置かれ、大学入試センター試験もマークシート方式が取られています。

それが、次期学習指導要領では、高校卒業レベルで5000語、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に扱う言語活動として、特に「話すこと」「書くこと」において発信力を強化する（発表、討論・議論、交渉等）とあります。大学入試センターも2020年度から「書く」「話す」テストで外部の民間試験活用を検討しています。将来的には受験資格に民間試験の結果が必要になるとも言われています。

高校時に、英語での発信ができるようにするためには、小学校終了段階では700語程度身に付けておくようにすることが今回の答申では明確に打ち出されています。小学校のうちに、「書く」ことができるように、アルファベットの大文字・小文字を正しく覚えること、スペルを正しく覚えること、正しい発音で「話す」ために、短文を覚えることなどが必要になるわけです。小学校で身に付けていないと中学校・高校では追い付かなくなって、困ることになってしまう、英語についてもそのような系統的な学習だということです。

算数においては、比較的系統性の意識が教員も子供も保護者もあるようで、掛け算九九の暗記は当り前のこととして行われてきています。しかし、一番覚えることに関して脳が活発に働く小学校段階で覚えるべきことは他にもたくさんあるということです。そして、小学校段階の覚えることに関して最良の時期を逃してしまうと中・高では取り返しが効かなくなってしまいます。アルファベットにしても、簡単な英単語にしても、小学校で身に付けておくことが中高での「主体的・対話的で深い学び」を可能にします。

英語だけでなく、基礎的基本的な知識・技能を小学校段階で確実に身に付けておくことが、今後ますます重要になります。すべての教科で「学習内容の削減は行わない」とされているのもそのためです。小学校段階での学習の基礎がこれまで以上に問われることになると私は捉えています。

1月28日（土）は学校公開です。道徳授業地区公開講座として、2校時は1～3年の道徳授業を、3校時は4～6年の道徳授業を公開します。4校時はこの「次期学習指導要領答申」の趣旨を踏まえ、「特別の教科」となる道徳について、いじめ未然防止の観点から、私の方でお話しさせていただき、皆さんと一緒に考えたいと思います。

私は、道徳についても、系統的な指導が必要だと考えています。

それは、発達課題という子供の健全な成長のために各成長段階で習得させるべき課題を踏まえた指導観をもって指導にあたる必要があるということです。道徳の教科化では「考える道徳」「話し合う道徳」という言葉が飛び交っています。上記の英語教育と同様に、道徳でも高校段階では、様々な価値観や道徳観を交えて、討論・議論などをしながら、よりよく生きるために一人一人が考えるという道徳であるべきです。しかし、小学校の低学年のうちから、善悪について考えさせることはできません。なぜなら、低学年の子供にはまだ自律的な善悪の判断のできない発達段階にあるからです。この時期の子供は「大人が『いけない』と言うことは、してはならない」といったように、大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになる時期なのです。

教えることをしっかり教える、叱るべきことはしっかり叱る、そうすることが子供の道徳観を育てていくのです。日本人の規範意識の低下は、まさしくそれを怠ってきた大人の責任です。「いじめはどんなことがあってもいけない」と教えることができるのは小学校低学年までです。しかし、その生まれてから8、9歳までの間に、けんか、戦いごっこ、悪ふざけ等の中で、汚い言葉・殴る蹴るを大人が見過ごしています。見過ごすことは肯定することと同じです。「こういう経験も必要だ」と声高に肯定する大人さえもいます。まだ小さな子供ですからすぐに止める緊急性を感じないかもしれません。でもよく子供の関係を見てください。やられる方の子供は固定していることが多いはず。そして、やる側の子供は複数の場合が多いはず。やられたらやり返せという親もいますが、なかなかやり返すことはできずこの関係性がずるずる続くことが多いです。やる側の親は何の問題も感じていないのが常です。そして、この関係性がいじめに発展しがちだということです。こうなると親公認のいじめであり、親も我が子の行為をいじめと認めません。しかし、重大事態になった時はこのような親も責任を問われることになります。「どんなことがあってもやってはならない」それを子供たちに理解させる学習こそ、道徳であると私は考えています。

保護者の皆様をはじめ、地域の皆様のご来校を心よりお待ちしております。